

どのようにして自主的、 創造的な子どもを育てるか

慶応大学教授 村井 実

教育研究大会
記念講演

この文章は、去る二月九日、市民体育館などの会場で開かれた「第二十一回南国市教育研究大会」での、記念講演をまとめたものです。



子どもは本来、自主性創造性があるものだが…。

教師の皆さんはだれでも、子どもたちを自主的創造的に育てたいと思っています。

しかし、私たちがそう熱く思っている一方で、子どもたちを自主的創造的でなくするような教育の危機というものが、深いところで進行していることに、まず気づかなければなりません。それに気づ

くことよって初めて、自主的創造的な子どもを育てることができると思います。
では、それはいったいどういうことか。

今、学校教育全体が、非常に機械的になり冷たくなっているという事です。それが、子どもたちの持ち前をいつのまにかしばませ、枯らし、衰えさせているのです。

例えば、共通一次試験で思うことですが、どうして何十万人の少年少女が同じ時間にある場所に集まり、まったく意味のないわくを塗りつぶすことを、全国でやらされているのか。これを、だれもおかしいと思わないところまで来て

しまっているようです。

そんな中で、子どもたちに自主的創造的であれと、どうして言えるでしょうか。私たちは、自主的創造的にしたいと思いながら、一方では子どもたちを追い立てているのです。先生にしてみれば、小学校では六年間にこれだけ、中学三年間ではこれだけ覚えさせなければならぬというのが仕事です。教師はだれも、学校を冷たいところにしたかと思っていま

考え方は、明治のときと同じように、「子どもは何もわかっていない。だから、わかるように教えないければならぬ」という姿勢ではないでしょうか。

子どもを、自主的創造的に育てるための出発点は、子ども自身もともと考えることができる。つまり、子どもはもって生まれて自主的かつ創造的である。ということ、理解することです。私たちは、子どもが成長することを、わからなかったことが、わかるようになると考えて来ましたが、子どもは本当はわかっているんです。ただ、そのわかり方がいろいろ変化し拡大しているだけで、決してわからないのではありません。

自主性創造性を育てるということとは、生まれ持っているものを、何としても壊さないことです。

そのために、学校が暖かいものにならなければなりません。一人一人の子どもには、自主性と創造性が備わっていることを、心の底から信じてあげてください。先生がたは、それをどのように発展させていくか工夫をして欲しいと思います。

『北風と太陽』の話で、お日様がマントを脱がしたように、暖かいお開きの学校の中で、子どもたちの生まれ持っている自主性創造性を出させてあげてください。

現在、私たちの子どもに対する